

Charles Villa-Vicencio,
*The Spirit of Freedom : South African
Leaders on Religion and Politics.*

Berkeley : University of California Press, 1996,
xxxii + 301 pp.

まきのくみこ
牧野久美子

本書は、南アフリカ共和国の反アパルトヘイト闘争を導いてきた指導者たちへのインタビューをまとめたものである。インタビュアーである著者は南アの神学者で、21人の指導者との対話を通じて、彼らを支えてきた政治的信条、そしてその背景にある宗教観を浮かび上がらせている。インタビューの対象者は以下のとおり（掲載順＝アルファベット順）。N. Alexander, R. Alexander, F. Auerbach, C. Carolus, F. Chikane, S. Duncan, E. Gandhi, N. Gordimer, C. Hani, T. Huddleston, N. Mandela, G. Mbeki, F. Meer, S. Mogoba, R. Mompati, I. Mosala, B. Naudé, E. Rasool, A. Sisulu, J. Slovo, D. Tutu.

インタビューされた21人のうち、もっとも多いのはキリスト教徒であるが、ユダヤ教徒、ムスリム、ヒンドゥー教徒、さらには無神論者も含まれている。また、民族的背景の相違に由来するアパルトヘイト下での彼らの経験の多様性も顕著である。しかしながら、そのような多様性のなかに形を変えながら幾度も現れるモチーフがある。

とくに印象的なのは、社会主義思想と宗教（ことにキリスト教）との親和性である。本書に登場する社会主義者の多くは無神論者であるが、社会主義思想と宗教とは本来矛盾するものではなく、敵対するべきではないとの認識が目立つ。かつて司祭を目指していたハニ(C. Hani)は『共産党宣言』を読んで聖書のヴィジョンと似ていると思ったという(p.118)。ただし、教会に対しては概して批判的態度が目立ち、教会は果たすべき役割を十分に果たしていないとき

れる。この点に関連して興味深いのは、神そのものと教会とを別物として、信仰を持つ者もまた既存の教会に対する批判を行っていることである。これはオランダ改革派教会がアパルトヘイトを支持し正当化していたために、アパルトヘイトに対する闘いが政治的なものであると同時に宗教的なものともなったことを反映するもので、オランダ改革派内部から批判を行ったノウデ(B. Naudé)をはじめとして、インタビューされた聖職者のなかには所属する教会と深刻な対立状態におかれた者がある。また、黒人や女性といった抑圧された者の側に立って神学を再解釈する、「解放の神学」の試みも注目される。これは抑圧者／被抑圧者という対立構図のなかで神をとらえようとする点において、社会主義思想に歩み寄るものである。南アのキリスト教界の頂点に立つチカネ(F. Chikane)が無神論者の多くが解放の神学に関心を持っていることを指摘したうえで、「彼らは神ではなく教会に反対しているのだ」と述べているのは示唆的である(p.68)。

現大統領のマンデラ(N. Mandela)は、獄中でさまざまな宗教・宗派の教戒師と話したことを貴重な経験だったと述懐する(p.148)。異教徒への尊敬、あるいは聖職者と無神論者との間の相互信頼関係は、本書の至るところに見受けられる。この寛容の精神は反アパルトヘイト闘争とともに闘った過程で育まれてきたものであり、それを維持し南アの民主主義の基礎とすることができるかどうかは、共通の敵を失ったこれからが正念場である。インタビューが行われたのは、「アパルトヘイト後」が現実になってきており、しかもまだ国民統合政府を誕生させる1994年の初の民主的選挙が具体的に見通せない、92年から93年初頭という微妙な時期である。この時期の彼らの言葉は、新たな南ア社会建設の基盤となるべき理念と彼らが考えるものをもっとも純粋な形で表しているように思われる。「あとがき」でも触れられているように、今後多くの政治的妥協を経て南アが進むべき針路を見失ったときに立ち返るべき原点として、本書は長くその意義を保ち続けるであろう。

(アジア経済研究所広報部編集第1課)